小野お通

左京区 田中 誠孝

小野お通（おののおつう）とは桃山江戸前期の歌人、書家であり、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の侍女として仕え、浄瑠璃の起源とされる『十二段草子』（『浄瑠璃物語』）の作者であるとされたが後に作者ではなく曲節をつけて語るように改作した人物とする説が有力になっている。小説「宮本武蔵」に登場する「お通さん」はこの小野お通がモデルになったようである。書道史上、当代を代表する女筆としてうたわれるがネットで書家や歌人として検索してもその名が挙がることはなく不思議な人物である。

小野お通のことを調べるきっかけとなったのは、たまたま古い軸を求め、そこにどのような歌が書かれているか調べたことからである。小野お通が書いたということは「極書、極め札」が二通入っておりそれで確認できたが、何しろ400年も経過している軸のことで書の表面が一部剥がれ落ち文字自体の判読が難しい状態であった。大学の教授で読める人が立ち寄ることがあるのでということで購入した店にしばらく預けておくことにした。

もともと「書」というものに興味があった。それは自分がまったく書けないことの羨望とその美的な書体に魅かれるものがあり、高野切臨書なるものを購入して眺めていることがあった。ある時、美術館に入って北大路魯山人の彫った赤壁賦（刻字屏風1914年）に出合い感銘を受けた、彼の装飾した壺や鉢を見ても全く感動しなかったのにである。赤壁賦とは刻字の屏風のことで500字余りの文字が板に彫られているのである。もともと蘇軾（そしょく：中国の官僚であったが左遷され不遇にあった詩人）が詠んだ詩である。その端正な行書の美しさにはまったく驚かされたし感動した。

北大路魯山人は本来書家であり「高みを行く人間は、大衆には決して理解されない」と豪語していたそうであるから大衆の一人である私が彼の壺や鉢を見ても感動しないのは当を得ているのかもしれない。

数ヵ月後に軸を購入した店から判読出来たとの連絡が入ってかけつける。軸の内容は平安時代の歌人である四条宮下野（しじょうのみやしもつけ）が詠んだ歌を江戸前期に小野お通が書いたものであることが判明した。

「ながきよの月のひかりのなかりせば雲ゐの花をいかで折らまし　下野」

長い夜を明るく照らす、今宵の月の光は、陛下の末永い御代のご威光のように畏く存じます。それなくしては、尊い宮中の桜の花を折り取ることなど、どうして出来たでしょうか。という内容であった。

小野お通は宮中から庶民に至るまで人気のあった書家であったらしく、京でも最高の教養人の一人として儀状から礼状まで「女筆」として出版されており、世の女性の書の手本となっていた。

「春のめでたさ　どなたもめでたくおもひまいらせ　候かしく」

しかし、これほどの有名な書家が今まで世に知られることがなかったのは何故であろうか。昭和初期に「真田勘解由家文書」が公開されてはじめて小野お通の実在が証明され、『浄瑠璃物語』の作者であるというこれまでの伝承に誤りが多かったことがわかった。

「真田勘解由家文書」とは二代松代藩主真田信政の長子である信就（通称勘解由）を始祖とする家系に残る文書で「真田信政」の側室「お伏（二代目お通：小野お通の子供）」が、京都で八橋検校から直接に箏を習ったなどといったことが書かれている。

お通は多くの和歌も詠んでいる。

「あかざりし　花に心を残しつつ　わが身は宿に　かへりぬるかな」

「有無しらぬ　だるまの胸になにかある　ヘンてつもなし　あばらぼね也」

小野通「四季女文章」